

帰国

昭和二十三年六月二十一日 ナホトカ港を出航

(永徳丸 第二十一梯団)

一九九八人)

二十四日 舞鶴に上陸

二十七日 舞鶴を出発、京都を経

二十八日 新潟県南蒲原郡加茂町

(現在加茂市)の生家に

帰着

帰国後

昭和二十三年九月二日 (株)清野屋に復職

昭和三十三年七月二十八日 現住所に転居

昭和六十三年三月三十一日 役員定年により退社

現況

息子は独立、現住所で妻(昭二・一〇・一〇生)

と二人、年金生活ながら平穩無事の日々を送り、今日に至っている。

平成三年八月、新潟日報社主催による「ソ連・極東親善の旅」に参加。ウラジオストック、ナホトカ、

リストビヤンカ、イルクーツク、ハバロフスクを回り、それぞれの日本人墓地を参拝してきた。

(新潟県 中村 甲)

シベリア抑留体験記

福井県 井上博夫

昭和二十年八月九日、私は北満山^{シベリア}神府騎兵隊下士官候補者隊にて日ソ開戦の報と同時に山神府の軍人軍属の家族輸送の任務をもって内地へ帰還を命ぜられ、即刻客車四両に家族の方々と多くの物資を積み南下しました。車窓から原隊元の^{アイボン}環瑠六二二部隊にも別れを告げ、懐かしく最敬礼と捧銃をして通過。もうこの時既に元の同胞はソ連と戦いを交え、自らの手によって火を放っていたので、私は赤々と燃えている兵舎を眺めながら南下し北安まで来ました。

ところがちょうどこのとき雨に見舞われ、川の増水により鉄橋を通過することが出来ず、一晚様子を見る

ことになったのでした。この一事が私達にとって運命の大きな別れ道となったのです。

私達兵隊はどうすることも出来ず、家族の方の安否を気遣いながらも、お別れをしなければなりません。ソ連軍の指揮下に入り北安の飛行場の格納庫に収容され武装解除を受けなければならぬ羽目となり、全く知らない部隊と共に行動を続け、九月上旬までコシクリートの上にアンペラ一枚敷いての共同生活が続き、九月七日、千人単位の部隊で北へ北への行軍が始まりました。毎日が野宿にて、もう既に満州の冷え込みは日一日と夜は厳しく、上に掛けた外套には霜が降り真っ白となり、食糧も段々少なくなり、その上ソ連の言う東京ダモイとは全く逆の方向に、シベリアへ向けての行軍が続きました。

さて、この北へ向かって行軍中の全く予期しなかった不幸の出来事が一つあります。

ある晩五人の同胞がシベリアへ連行されることを知り逃亡したのです。しかしソ連の監視兵と軍犬によりこの五人は目的を果たすことが出来ず、朝私達の部

隊が出発のため整列したとき前に出され、三メートル位の間をあけて並ばされて、一人ずつ順番にソ連の兵士によって銃殺に処せられたのです。これは私達日本兵への見せしめのためと知らされ、今後は絶対にこのような行動は取らないようにと部隊長より命ぜられ、その後はこのようなことはありませんでした。この時の様子は何と言っても同胞が目の前で撃たれ、ソ連に対し「この野郎！」と心の中では叫ぶものの、部隊長といえどもどうすることも出来なかったのです。大きな荷物を背負っていても皆前にぼったり倒れ、なお首に銃剣を差込みとどめを刺す。なかなか抜けないので足で頭を踏みつけて銃剣を引き抜く。何とこれが無条件降伏の代償か、畜生この野郎と心に思い、手を合わせて拝むのが精一杯でした。

こうしてダワイダワイ（早く早く）とマンドリン小銃を肩に掛けたソ連兵の監視のもとに、北へ北へと野宿を続け、ブラゴエを目指して夜暗くなるまでの行軍。着いた所で糧秣を受け飯盒炊飯、もうあたりは暗く手探り状態の中、空にはきらきら星を頂きながらの野宿。

段々と体は日毎に疲れ果て、顔はこげ髭は延び、体力のある者となし者との差ははっきり出始めてきた。連行される途中小休止があり、座って休むうちに眠りつき出発の合図にも目の開かぬ者には、お互いに気を使ひゆり起こすといった状態も出てきた。

こうしていよいよ最初のラーゲルに着き、大体四〇人から五〇人の班に編成となり、いよいよ作業に入った。作業は土方仕事や木の伐採、搬出、薪造り、道路作り、鉄道の路盤工事、発破用の穴掘り作業であった。大体の作業は班単位のノルマで、病弱者のいる班長はいつもプララップ（作業監督）よりノルマ遂行について百%を強制されていたものである。私は子供の頃から百姓の手伝いをさせられ肉体労働にはある程度自信もあり、初めて親に貰ったこの体になりたいなあと感謝をし、祖国の空を眺め手を合わせ、元気で働いて必ず無事家に帰ることを心の中で報告をしていたものである。初めの二年半くらいは次々と奥地へ移動させられ、鉄道の路盤工事をさせられた。

週一回の割で風呂があった。しかし、風呂といって

もボーチカ（木の桶）と言って、日本で見ると一斗入りの酒樽のような木の桶であったが、上が小さく下が大きい。その桶に約七リットルの湯で要領よく自分の体を洗い流すといったものである。終わり次第襦袢などの取り替えをした。さすがに風呂の中は暖かく保たれていた。しかし終戦直後から入ソ当時は白い虱と南京虫に悩まされたものである。特に虱は体の衣服のいたる所にぎっしりと、まあなんとこれだけ繁殖出来るものだなあと、今思い浮かべると背筋がぞっとする。この虱は寒さには大変強い。零下四十度以上の寒さの中、衣類を外に置いては何ともない。これを退治するにはただ熱湯につけるか煮沸する以外はなかった。このような中にも年に一回くらいは身体検査があり、体の弱い者はオカといって、そうした施設に集められ約一カ月から四十日位の間は重労働は免除、その上食事は普通食が与えられ、元の体に戻るとまた作業隊に送られるといった具合であった。

そのオカというランクを決める検査が実に面白い。

聴診器を当てるでなし、脈をとるわけでもなし、尻を

つまんでみるだけ。大体極度に痩せこけた者は該当する率が高かったようだ。中には、持病の神経痛やリュウマチといった方は残念ながら該当することがなく悩んでおられた方もあった。その反面、体質が夏やみの私は、この検査にも非常に弱った顔をしてドクトルの前に立ち、しょんぼりした姿を見てもらうことにしていた。決まって夏一回はこうした恩典に浴して一カ月程度は体を休めることができ、また次の作業からは精を出して働くことができ、いつもハラシヨラポータで点数を稼げたことが非常に大きな収穫であった。毎日が空腹と重労働等を強いられ耐えきれなくなり、心身共に追い詰められて尊い一命を失われた方も、あの凍土に倒れ埋もれた方もあるということを今なお忘れることは出来ない。

あのシベリア奥地での捕虜生活の中で得た貴重なことの一つに、また食い物の話になるが、ある所で我々の食糧・スーブの材料の鯧粕の空き吠かまを見つけ、これを逆さにしてはらって得た鯧粕の全くの粕、これを御馳走になろうと空き缶で炊いて食べることになった。

しかし残念ながら塩気がない。幾らがつがつした我々にとっても鯧粕の水炊きだけは食える物ではなかった。そこで誰かが茶色い岩塩をくれた。この岩塩のおかげで実にうまい鯧粕の煮物にありついたというものである。この世の中で一番うまい物は塩であり、また一番うまくない物も塩であるということをいやというほど知らされたものである。

何の前ぶれもなく私の首筋に腫れ物が出来、激痛と四十度くらいの熱が二昼夜ほど続いた時のことである。ドクトルはドイツ人の女医さんであった。この方も先の独ソ戦において捕虜となった軍医中尉殿であった。この方が少しの間も私の傍らを離れることなく、夜も眠ることもなく、「井上、バク（痛いか）、井上、バク」と声を掛けて、私を抱き締めるようにして「バクもうすぐ、バクもうすぐ」と言っていて付ききりで看病してくれた。後で、私が熱のため相当うわ言を言っていたと笑いながら話してくれた。その後も「井上元氣、スコーラ東京ダモイ」と言って励ましてくれたあの若い美しい女医さんの顔、また態度は、今も忘れることは出来

ないと感謝している。先に記したように私は作業はいつもハラシヨラボータで、何回もソ連の女の方から一緒になつてくれないかと誘いを受けたことがあったが、その都度断り続けてきたものである。しかしながら、この軍医さんから声が掛かったならばお受けしていたかも知れないし、私にとつては神仏のような方でもあった。実に惜しいことでもあったと、今でも思い出される。

もう一つ、これはある収容所で同じくゲルマンスキー(ドイツ人)と作業をしていたことがあるが、彼等は本当に忠実に作業を遂行していた。しかしながら毅然とした態度は我々の見習うべきことも多かったようである。ある時誰かがロシア人の残り物を見つけて一緒に食わないかと誘ったことがあるが、彼等は絶対に口には入れなかつた。その点、日本人は恥ずかしいなあと思つたことがある。後でゲルマンスキーが言うのは、足で蹴飛ばしてもそのような物は口の中には入れぬと言つたことがたま思ひ浮かぶのである。あのナチス魂で独裁家ヒトラーの率いる独軍がソ連に戦いを

挑んだことがうかがえる。

ソ連においての当時の作業ノルマというものは徹底した面があつた。ある路盤工事のため、縦穴を四メートル掘り下げ、さらに横に二メートル掘り、この奥に火薬を仕掛け爆破させることがあつた。勿論手掘り作業で、掘つた土を短い柄のスcoopで地上に掘り出さなければならぬ。私はこの穴掘り作業には毎日ノルマ百二十以上を出して、午前中でカザルマダモイということも度々あつた。そうして、これからが実に面白い。早く帰つた私達は食事も多く、黒パンも多く貰うことができた。一日の作業を晩まで時間をかけて働いて帰ってくる者よりも一日に与えられる食事が多いということである。

今一口に捕虜生活四年と言うけれども、私は帰国するまでに分所を十三回も移り変わり、特に真冬の移動は恐ろしい。移動といえれば必ず休日の日曜に当てられる。零下四十度近くもある中を米貨の荷台に立つたま皆背をこすりながら励まし合ひながら知る筈もない奥地の目的地に送られ、着いた時にはとつと日暮

れ、暗闇の下手さぐり状態で夕食の準備、第一に薪ストーブのカザルマの暖房で、てんやわんやである。

こうして、中には目的地に着くまでに凍傷にかかり手足の感覚も無くなり、小便をするにもズボンの股ボタンをはずすこともできずたれ流し、これが凍りつき、最後には口もきけずただ「うおお、おっかぁ」と母親を呼ぶ声。最後の何とも言えぬ叫び声だけが精いっぱい、あのシベリアの凍土に倒れた方も何人かいた。

実に気の毒である。本当にこれが人様のこととは思えず、嫌な予感もし、夢見たこともあり、今日一日、今日一日の繰り返し、しかしながら作業は零下四十度まではきちんと八時間労働が守られていた。

屋外作業の昼食は、カザルマからそりにて作業現場に運ばれる。現場に着くまでには完全に冷えきっており、これを各日腰にぶら下げた缶詰の空き缶に貰って、焚き火であたためて頂くというものである。品物と言えば雑穀の雑炊のような物、いやスープと言った方が当てはまるかもしれない。箸はいらない。第一、箸にかかるような物がない。冬の八時間労働と言うと、朝

は暗いうちに出発し、夜はきらきら光る星を頂きながらのカザルマダモイである。肩にはマンドリン小銃を掛けて監視づきの兵隊は、朝晩の（人員調べ）点呼、これが僅か四十人くらいの捕虜の数が一度や二度では無理、時間にしても五分や十分ではなかなか終わらない、三十分ぐらいかかることも珍しくはなかった。先にも述べたように零下四十度近くの寒さの中、また作業で疲れた体にはとても長く感じた。そうしてやっと夕食になる。昼間作業を終え各自持ち帰った薪でのストーブのおかげで暖を取り、床に就いた。さて床に入ってからのは話は、先ず帰りたい、うまい物を食いたい、内地の家族のこと、また一体いつ日本に帰れるのかというもので、誰もが同じ気持ちであったと思う。本当にシベリア奥地の冬は恐ろしい。我々捕虜には零下四十度までは屋外作業が義務づけられていたようである。さて、あのシベリア奥地にも四季はある。春ともなれば草木も芽を吹き、寒さからも解放され、短い間ではあるが夏もある。しかし秋が早く冬が長い。ソ連の主食カルトシカ（馬鈴薯）が作れる所はあの広い広

大な土地でもほんの一部であろう。あとはツンドラ地帯で、高い山とともなく一面が不毛の地と言う方が当てはまるかもしれない。落葉松やエゾ松、トド松の育つ所は上等の土地であろう。

こうして約二年半くらの奥地の生活からも南下して、途中鉄道五十トン貨車にストーブを取り付け薪を焚きながら十五日間ほどの旅でハバロフスク近郊に約半年、四年目の一年間はウラジオストックにおいて港の作業、貨車積み、大きな貨物船の荷の積みおろし作業であった。

さて私は先にも記したように十三回もの移動で、戦友も変わり、また地名等もほとんどわからないままの生活であった。こうした中、三年目の冬、要領よく白系ロシア人の収容所幹部三人の当番に付いたことがあった。身ぶり手ぶりにロシア語の片言を交え日常の生活對話はできて、約半年間生活を共にしたことがある。彼等三人はやはり我々と同じ、先の独ソ戦においての捕虜だということであった。もう国には帰れないと言っていた。

ある時、彼等は私に白米五合（約一リットル）程と牛乳を出して飯を作れという。鍋はホーローの洗面器のような物、どうにか牛乳飯が炊き上がり彼等にこれを報告すると、笑顔でハラシヨハラシヨと言ってほめてくれた。それからである、炊き上がった鍋の中の飯を十文字に筋を入れて四等分し、一緒に顔を揃えて食べろと言ってフォークとスプーンを出してくれた。私はその時一瞬はっとした。なんとと言っても彼等三人は戦勝国の元佐官級の方。そこでこれを辞退すると、同じ働く仲間だ、遠慮するなど言って肩をポンと叩きハラシヨと言ってくれた。私はその時、個人的に付き合えば何と心の優しい方だなあと感じて感謝し、心の中ではこれが地獄で仏に会ったようなものだと思った。何分にもあの広大な土地に百カ国以上の多民族国家であり、民族的差別は何もなかった、これが非常に良いことであり、また我々にとっては何も救いでもあったことは言うまでもあるまい。

こうしてハバロフスクからウラジオストックに移り、最後の一年は港湾作業を主に沖仲仕といったようなこ

とをした。もうこの頃には労働報酬に対しての賃金も出され、食事の方も次第に良くなり、前の奥地より比較すれば気温も楽だし、これで内地へ帰ることもできるなど内心ゆとりをもてるようになった。ある夕方、ルーブル（お金）を持って初めて白いふんわりしたパンを買い、ウラジオ港の湾に立ち静かな波を眺め、この水が先に帰った方達の舞鶴へ続いている、地図から見れば今飛び込み泳いででも帰れるような錯覚さえ起き、感無量になったことが今は夢のように思い出される。

ウラジオ港の作業は、船に積む、また、おろされた物資を五十トン貨車に積み込むものであった。この仕事は時間との競争であり、夜の真夜中でも作業に出ることもあり、特に六十キロ入りの穀物の貨車積みは五十トン車に八百五十袋あまり積み込まなければならなかった。十人のグループで、二人でよいしょと持ち上げたのを上手に肩に合わせなければうまくいかない。急な足場を登り、貨車の奥までは相当あり、チームワークの良さが非常に大切であった。私もこれは生まれて

初めての作業であった。今の時代のようにリフトもなければコンベアもなく、全部肩にかかったものである。しかし大型機械のオペレーターへの女性の進出には一際目を引かれたものである。男女同権とはこのようなことかと感心させられた。

ウラジオは色々参考になった。港に並ぶ大きな倉庫には日本陸軍軍用倉庫と大きな文字で書かれたのがそのまま残っていた。当時日本の軍隊は大手を振って我が物顔に町の中を自由にしていたのだろうと頭の中をかすめ、今、白分達の捕虜としての身分を一層悲しく感じたものである。それにしてもあの大きな文字が消されず残されていることに、共産党国家と資本主義国家との違いをまざまざと見せつけられたものである。こうして毎日の決まった作業ではなく、何に出くわすやら現場に着くまでは見当もつかない。今でも忘れられないのはセメントのばら積み作業だ。顔も鼻も衣服も、また呼吸困難になったことさえある。いくら続けてもきりのない作業で、実に苦労の種であった。また船一杯に山積みされた岩塩の荷おろし作業もあった。

先にも記したように、一握りの岩塩があつた。シベリアの奥地ではなくてはならない貴重品であることを思い起こし、作業に精を出したものである。

歩の悪い作業ばかりではなかつた。これは冬のある日のこと、貨車積込みの作業のときであつた。またあの重い六十キロ入りの穀物の積込みかと半分あきらめながら重い足取りで現場に着いた。肩は先の作業ですりむけ、軽い生傷はまだ痛々しく血の出た跡が皆残つていた。現場に着いて見ると今度は違う小さな段ボール箱詰りが山のように積まれていた。残念ながら文字は読み取ることも出来ず品物は何かよく分からなかつた。目方にしては七キロくらいで軽い。まず先の五トン貨車に両方の奥から積込み、なかなか時間もかつたが、この日ばかりは夜暗くなるのも苦痛ではなかつた。ところが中身はなんと見たこともないチョコレート箱詰とわかつた。そこで中の品物を上手に頂くことにした。冬場の衣服はありがたい。まずズボンの下足首の所をしっかりと止めて、ズボンの中に詰め込んでカザルマダモイという段取りだ。初めの間はマンドリ

ン小銃を肩に掛けた兵隊に内緒でわからないように、次にはこの兵隊にも打ち明け、チョコレートを彼の皮のシューバ（毛の外套）のポケットに詰め込んで、監視役をチョコレートで買収というわけだ。積込み終わり、箱の数はOK、貨車のドアには鍵が掛けられ、残る不安の一つにカザルマダモイに着いて点呼の時だ。これらもすればたまたまあの恐ろしいシベリアの奥地に送られるかもしれないと思う心配もあつた。しかし何もなく収まり、一件落着であつた。腹一杯詰め込んでその上お持ち帰りという、実にありがたい、盆も正月も一度に来たような気持ちとはこんなものかと皆で喜び合つた。長い間にもこんな作業は一回きりであつた。いや一回きりでよかつたことかもしれない。

さて色々振り返つてみて、寒さのつらさ、作業のつらさ、空腹のつらさ、そのほかに民主化運動による精神面のつらさも忘れてはなるまい。

入ソ当時より民主化運動は日を追つて進められ、さらにエスカレートして反動分子としての烙印を押されようものなら大変だつた。まあ一口にいうと日本人が

日本人を殺すとまでは行かなくとも、精神面ではそのようなことがあったのも事実だ。朝整列し、作業前には必ずアクチーブといって民主運動の先頭に立つ者から檄が飛ばされる。

「今、我々がこうして毎日ソ同盟のおかげにより食事も与えられ作業も出来るのは、レーニン及びスターリンのおかげである。我々はこの与えられた作業を百%いや百二十%を遂行しソ同盟の発展のために頑張ろう」といった趣旨のアジプロである。おまけに「今、日本の家族の者はアメリカ、イギリスの鬼畜のようなやからのもとで食い物もなく、どん底の生活に追い詰められ、女や子供はなぶりものにされている。我々は本当にソ同盟に感謝して毎日の作業を頑張ろう」といった具合である。

中にはこうしたことに批判的な者もあり、元の軍隊では幹部といった者でも、今度は反対に初年兵達にやっつけられるという場面も多く出てきた。特に大衆の前で批判を受け吊るし上げをされるとは全く気の毒なものであった。一つの例として、「このような者は絶対

日本に帰すことは出来ない、民主主義の敵だ」と壇上で叫ぶ。また、これに呼応して「そうだそうだ」と大衆コール。こうして丁度今の選挙運動の頑張ろうコールのようなもので、民主化運動は次第に発展し、その陰では奥地へ移される者も少なくなかったようである。帰国する者には、必ず舞鶴から東京代々木の日本共産党本部へ向かい野坂参三委員長に帰国の報告をするよう、また各県に帰った時には県本部委員長に帰国報告をするよう指示されたものである。

しかしながら、このようなこともごく限られた一部の者だけが実行したのかしらないが、大半の者はナホトカ港において乗船と同時に、心の中では「何が民主化だ、馬鹿なことを言うな」と思い、そうして舞鶴に近づき祖国のあの美しい緑の山が目に見える頃には心の片隅からも消え去り解放感にほっとしたものである。終戦より丸四年間、何と言ってもあの寒さ、空腹、作業の重労働、家に帰りたいと忘れることのできなかつた日を現実のものとしてつかみ取ることができたのである。それにしても、体力のなかった方や婦女子の終

戦闘際のどさくさに紛れての耐えきれない苦痛等を今なお忘れることはできない。

人間一生の間には、避けて通ることのできないこともあり、今静かに考えさせられるものである。幸いに私は元気で、昭和二十四年八月二十八日、丸々四年間の捕虜生活から解放され、家に帰ることができた。

最後に、あの寒いシベリアの凍土に倒れ眠られておられる方々の御冥福をお祈りいたします。

【執筆者の紹介】

井上氏と私は同じ三中隊へ同期入隊でした。

井上氏は四班重機、私は三班擲弾筒で、背中合わせの起居生活をしていましたが、昭和二十年五月の創立記念日の数日後、井上氏は下士候補志願で派遣、私は一期の検閲を終えた初年兵と共に二站陣地構築に出発、互いに別れ別れとなりました。

井上氏は、真面目で責任感の強い、実技においても抜群の成績でした。とにかく記憶力の強い素晴らしい方でした。

帰郷されてからも、種々の公役を務められています。

生年月日 大正十二年五月十八日

昭和十三年三月 南中山小学校高等科卒

昭和十四年四月 南中山村役場書記拜命

昭和十九年一月 南中山村役場退職

昭和十九年二月十九日 満州国黒河省環彈独立国境守

備隊第六一二部隊三中隊へ

昭和二十年五月 山神府騎兵隊下士官候補者隊に中隊

命令により派遣される

昭和二十年八月九日 山神府軍人軍属の方々の家族輸

送の任務をもって内地帰還を命ぜられる

昭和二十年八月十二日 北安にてソ軍の指揮下に入り

北安飛行場へ

昭和二十年九月 プラゴエシチェンスクより入ソ

昭和二十四年八月二十五日 大郁丸にて舞鶴へ

昭和二十五年より自家農業に

昭和四十年より南中山村農業協同組合理事 二期

昭和四十六年より南中山村農業組合幹事 一期

昭和四十九年 今立町農業委員 二期

昭和五十三年 山室部落区長

平成四年より今立中部土地改良組合理事二期目、現在

に至る

(福井県 天谷 小之吉)

私の抑留体験記

滋賀県 橋 本 健二郎

私は大正十一年十一月滋賀県(現日野町)で農家の二男として生まれました。

昭和四年必佐尋常高等小学校に入学し、昭和十二年三月卒業後、東京の堀井膳写堂に就職。

昭和十七年徴兵検査を受け、昭和十八年一月、歓呼の声に送られて大分市西部第六八部隊に入隊しました。そこで三カ月の教育を受けて渡満、佳木斯の満州第八四六部隊(独立守備歩兵第二四大隊)へ。

それから南叉の三中隊に入りました。初めて見る大

陸、もう春だというのにそこはまだ零下の凍てつく寒さで、異国の空を眺めてしばし望郷の念にうたれました。

それから四月に入って各特業別に教育を受けるため分かれました。私は三中隊より一人、他の中隊の兵と一緒に富錦陸軍病院へ衛生兵教育のため派遣され、ここで六カ月の教育を受け、原隊に復帰しました。以後南叉三中隊医務室にて濱田軍医殿のもと先任衛生兵とともにしばらくは平穏な兵舎生活が続きました。

兵舎は、佳木斯の本部や一中隊は煉瓦造りでしたが三中隊は木造の二重の板張りで、周りは壕を掘った土で裾の方は盛られていました。

当八四六部隊の任務は満鉄の守備と沿線の治安維持であり、私は衛生兵として中隊の医務室勤務や演習訓練に参加しました。そして、任務の都合で各中隊駐屯地がバラバラで、三中隊は南叉にあり、帶領、小口等、分遣隊がありました。

昭和十九年八月、富錦の東南方二〇キロの所にある五頂山の麓の満軍兵舎に入り、任務も国境警備となり